



子どもたちへの あたたかいご支援 ありがとうございます

公益社団法人セーブ・ザ・チルドレン・ジャパン
教育分野 2021年度活動報告



すべての子どもが 質の高い教育を 受けられるように。

2021年に教育分野へのあたたかいご支援をいただき、ありがとうございました。皆さまのご寄付が、**モンゴル、イエメン、レバノンの子どもたちへの教育の機会の提供、および教育の質の向上**につながりました。心からの感謝をお伝えするとともに、2021年度の活動をご報告いたします。2022年度も引き続きご支援をよろしくお願いいたします。

活動の背景

世界の**6人に1人の子どもたち**が、**教育へのアクセスを阻まれています。**

世界の子どもたち(6~17歳)の6人に1人が、学校に行くことができていないと言われています。たとえば、紛争で学校が破壊されてしまったり、避難生活下においても、十分な教育サービスが整っていません。貧困のために通学費や学用品のための費用が払えず、家計を支えるために働かざるを得ない子どもたちもいます。また、障害があることで周りの子どもたちと一緒に教育を受けられない子どもたちも少なくありません。

さらに、近年は、新型コロナウイルス感染症の影響で学校が長期間閉鎖したことにより、学習に遅れが生じてしまい、ドロップアウトしてしまうというケースも増えています。学校に行くことができない期間が長くなればなるほど、復学が難しくなってしまいます。



私たちの取り組み

紛争、貧困、障害、そしてコロナ禍においても、**子どもたちが教育を受けられるように。**

セーブ・ザ・チルドレンは、あらゆる困難下にある子どもたちが、継続して教育を受けられるようになるために、世界各地で活動を行っています。モンゴルでは、障害の有無や言語の違い等に関わらず、子どもたちが質の高い教育を受けられるための支援を行いました。また、イエメンでは長引く国内紛争下、厳しい状況に置かれた子どもたちに対して、レバノンでは、避難生活を送るシリア難民だけでなく、悪化する社会経済状況の影響を受けているレバノン人の子どもたちに対し、継続して教育を受けられるよう支援を行いました。さらに、新型コロナウイルス感染症の感染予防のための衛生面での指導も取り入れました。



「誰一人取り残さない」教育を、小学校から中学校へ。

【モンゴル】義務教育期間を通したインクルーシブ教育推進事業

■ **目的** 特別な支援を必要とする子どもたちが、義務教育期間を通して、個々のニーズに応じた指導や教育支援を受けられるようになる

■ **活動内容**

- (1) 特別な支援が必要な小学校5年生*の中学校進学への支援
- (2) 中学校におけるインクルーシブ教育システムの構築支援
- (3) 保護者の子育て支援
- (4) インクルーシブ教育推進のための政策提言

■ **事業期間** 2021年3月30日～2024年3月29日



対象地：ウランバートル市、
ウブスハンガイ県、ホブド県

*モンゴルでは1～5年生が小学校、6～9年生が中学校にあたります

■ 2021年度以前の事業の進捗

セーブ・ザ・チルドレンはモンゴルにおいて、障害、言語の違い、経済状況やその他の特徴に関わらず、全ての子どもが参加し、ともに学び、可能性を十分に伸ばすことができるよう、個々の学習のニーズへの対応を受けられる「インクルーシブ教育」を推進してきました。

2018年からの3年間では、事業対象地域の小学校と、学びに遅れが見られたり一度ドロップアウトしてしまった子どもたちの受け皿となっている生涯学習センターの体制強化と教職員の能力強化、学校に行くことができない子どもへのアウトリーチ、保護者や社会の障害に対する理解を促進するための啓発活動などを行い、インクルーシブ教育を推進してきました。また、これらの活動を通した学びをもとに、モンゴル国内でインクルーシブ教育がより推進されるよう、関連する法や規程の改訂に向けた働きかけを行ってきました。

■ 2021年度の活動報告

2021年からは、これまで小学校を対象に実施してきた事業を小・中学校に拡大し、義務教育期間を通して子どもたちが個々に必要な支援を受けられるようにするための活動を開始しました。



活動1. 特別な支援が必要な小学校5年生の中学校進学への支援

中学校進学準備のための教員向けの教材をつくり、教職員に対する研修を実施しました。



活動2. 中学校におけるインクルーシブ教育システムの構築支援

中学校の教職員向けに、特別なニーズのある子どもたち一人ひとりの学習指導計画の立て方、フォローアップの仕方、保護者との連携方法等に関する教材を作り、教職員に対する研修を実施しました。また、対象校に、障害のある子どもの学習を支援するための教材、運動用具、玩具などを提供しました。



活動3. 保護者の子育て支援

教職員や保護者向けに、思春期の子どもたちの心身の特徴や、心理的支援、学習支援の方法、また保護者と教職員との連携方法に関する教材を作り、教職員や保護者会メンバーに対して研修を実施しました。



活動4. インクルーシブ教育推進のための政策提言

インクルーシブ教育に関する政策や規程の改定に向けた働きかけを行いました。また、事業参加校の教職員が、各校におけるインクルーシブ教育に関する取り組みを自己評価し、改善について話し合う機会を設けました。



左：クラスメート同士で協力し合う関係づくりを目指す活動で、お互いの良い行動を書き出す子どもたち（ホブド県、2021年12月撮影）

右：事業開始後の、生徒に見られる前向きな変化やさらなる活動の改善について話し合う教師たち（ウランバートル市、2021年11月撮影）

緊急下でも子どもが 安全な環境で、必要な教育が受けられるように

イエメンやシリアにおける人道危機への対応として、難民や国内避難民、人道危機の影響を受けた地域の子どもに対する教育分野での支援を実施しました。レバノンでは、学習継続が困難なシリア難民およびレバノン人の子どもたちに対し、基本的な読み書き・計算の授業や、補習授業を遠隔で行いました。イエメンでは、学校の水・衛生施設の修繕や、学習教材の提供、補習授業を実施し、子どもたちが安全に学習を継続できる環境を整備しました。また、新型コロナウイルス感染症予防対策として、衛生講習なども取り入れました。

【イエメン・ハッジャ県】



生徒会活動のオリエンテーションを受ける子どもたちの様子(2021年8月撮影)

【レバノン】



スタッフが子どもたちに教材や文具を配布する様子(2021年6月撮影)

【イエメン・ラヒジュ県】



石けんを使った手洗いを練習している様子(2021年10月撮影)



教授法や新型コロナウイルス対策の研修を受ける教員の様子(2021年8月撮影)



子どもが自宅で遠隔授業を受ける様子(2021年9月撮影)



教員から子どもたちへ感染症や病気、手洗いについて伝える衛生啓発の様子(2021年10月撮影)

【レバノン】 「授業へ参加するのが楽しくなりました」 ジャドさん(仮名)

ジャドさん(14歳)は、2013年に家族とともにシリアからレバノンに避難してきました。両親は別居し、姉と母親とともに親戚の家を転々とする生活を送っています。ある時、身を寄せている先の親戚が「ジャドさんたちはタダで私たちのご飯を食べている」と言っているのを耳にして以来、食事もしっかりとることができず、また、不満を言われないようにと、家計を支えるために、学校に行かず働くようになりました。

2021年、ジャドさんは母親の勧めで、トリポリ市内で実施されるセーブ・ザ・チルドレンの教育プログラムに参加することになりました。4年間もの間学校に行くことができていなかったため、学習の遅れに不安を感じていましたが、母親の励ましを受けながら、基本的な読み書き・計算の授業に参加し、学習に励みました。

「最初は、他の生徒や先生に笑われるのではないかと心配でしたが、だんだん授業に参加することが楽しくなりました」と言うジャドさんは、「今では英語で100まで数えることができるようになりました」と嬉しそうに続けます。新型コロナウイルス感染症感染拡大の影響により、授業は遠隔での実施となりましたが、ジャドさんは努力を続け、コースを修了することができました。

ジャドさんの母親は、「授業を受け始めてから、彼は、以前よりも自分の考えを表現するようになり、自分に誇りを持つようになりました。希望をもって成長することができていると思います」と話しています。



授業を受けた体験をスタッフに語るジャドさん

【モンゴル】

子どもたちが協力し学び合える環境を ～オトゴンゾヤさん（仮名）のストーリー～

ウブスハンガイ県のアルバイヘル小学校に通うオトゴンゾヤさん（5年生）にはてんかんがあり、発作を起こすことがあるため医師の指導を受けています。彼女が2年生の時、バンドウラムさんが担任教師となりましたが、オトゴンゾヤさんは当初、読み書きも話すことも苦手で、なかなか自分の気持ちを表現することができませんでした。

バンドウラムさんは、セーブ・ザ・チルドレンのインクルーシブ教育事業に参加し、特別なニーズのある子どもの個別指導計画の立て方、学習教材の作成方法、また、子どもたち同士がお互いに協力し合い学ぶことができる学習環境づくりについての研修に参加しました。

バンドウラムさんは、オトゴンゾヤさんが他の生徒たちと交流しやすい学習環境づくりを心掛けました。よく話す生徒とオトゴンゾヤさんが隣同士に座るようにし、2人に対し、お互い助け合い学び合うように伝えました。この席の配置のお陰もあり、オトゴンゾヤさんは、次第に周りのクラスメートと話したり授業内で協力し合うようになり、活発にクラス活動に参加するようになりました。バンドウラムさんの、オトゴンゾヤさんに合わせた日々の指導や継続的な励ましによって、読み書きや話すスキルも向上し、宿題もこなせるようになりました。また、工作が好きなオトゴンゾヤさんは、美術クラブに入り、粘土で像を作ったりするようになるなど、学校での日々の生活や学習を楽しんでいます。



オトゴンゾヤさんと彼女が作った粘土細工(右上と右下)
オトゴンゾヤさんの教室の様子(左下) (ウブスハンガイ市、2021年11月撮影)



セーブ・ザ・チルドレンの実施した研修は、理論だけでなく実践も含む、実りのあるものでした。また、教師だけでなく、スクール・ソーシャルワーカーや、庶務担当などあらゆる立場の教職員が参加することで、インクルーシブ教育に対する共通理解をつくることができたと思っています。

研修の後、私の学校では、6年生から9年生対象の「子どもにやさしい教室」を設置しました。また、子どもたちに対し、個人またはグループ活動を実施するための研修スケジュールも立てました。現在、対象学年の計16人の生徒たちが、この教室で学んでいます。そして14人の教師たちが、研修で学んだことを生かし、それぞれの子どもの発達と学習をサポートするための様々な取り組みを行っています。

私たちは、子どもたちの保護者に対しても、インクルーシブ教育に対する理解促進のための働きかけを行っていく予定です。



(アウンビレッジさん、ウランバートル市79番学校の研修担当職員)